

出題分析		
試験時間 90分	配点 50点	大問数 4題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]	
<p>【概評】</p> <p>〈現代文〉</p> <p>例年通り評論文 2 題構成。本文量は昨年度と同程度。設問数は合計 13 問で平年並み。最終問題では例年通り制限字数 120～180 字の記述問題が課された。課題文は例年以上に硬質であり、高度な読解力が試された。設問も (四) の選択肢が例年通り長く、また正解を絞り込みにくいものが含まれていた。</p> <p>〈古文〉</p> <p>問題文の分量は昨年並み。設問数も昨年と同じく 7 問だが、枝間があり解答数は 1 つ増えた。和歌中の空欄補充や、助動詞や敬語に関する設問にも解答が難しいものがあり、総じて高いレベルの読解力が求められた。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>本文の分量は昨年より増加し、300 字を超える長文に戻った。設問数は昨年と同じく 5 問。本文全体の方向性をつかむことができれば各設問は比較的解答しやすいが、一部に紛らわしい選択肢も含まれた。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	古文 (紀行) 源通親『高倉院厳島御幸記』	政争の中で譲位した高倉天皇が、厳島へ御幸するまでの日々を、近臣の立場から記した日記。文法 1 問、敬意の対象 1 問、解釈 3 問、和歌の空欄補充 1 問、内容合致 1 問の構成。	やや難
二	漢文 (文章) 沈徳潜『唐宋八大家文読本』	蘇轍が自身の官職と引き替えに、投獄された兄・蘇軾の助命を求めた嘆願書の一節。解釈 2 問、返り点 1 問、書き下し文 1 問、内容合致 1 問の構成。	標準
三	現代文 (評論) 森正人『誰が場所をつくるのか—ポストヒューマニズム的試論』	空間に人間が解釈をほどこすことによって作りだされ、社会で共有される「場所感覚」について論じた文章。本文は標準的だが、一部に迷いや難しい設問がある。漢字の書き取り 1 問、脱文挿入 1 問、理由説明 2 問、空欄補充 2 問、内容把握 1 問、内容合致 1 問の構成。	標準

設問別講評			
四	現代文 (評論) 江川隆男『残酷と無能力』	生と死について考察し、新型コロナウイルス禍の哲学的意義までつなげた文章。本文は抽象的かつ硬質。設問も選択肢が長く、また一部に正解を絞り込みにくいものが含まれた。内容把握 4 問、記述問題 (120~180 字) 1 問の構成。	難

合格のための学習法

〈現代文〉

早大法学部の現代文では毎年難解な文章が出題され、段落ごとの内容を丁寧に把握したうえで文章全体の構造を捉えることが要求されている。対策としては、過去問や模試を通して抽象度の高い評論文の演習に積極的に取り組むこと、そして文章全体の論旨や構造に留意しつつ、問題文を 100 字あるいは 200 字程度で要約するなど、日頃から記述の練習を継続して行うことが効果的である。

〈古文〉

法学部は出典の幅が広く、応用レベルの読解力が求められることが多い。基本的な文法事項の識別や敬意対象の判定は万全に対策しておきたい。和歌に関する問題もよく出題されるほか、空欄補充は多用され、文学史などの知識問題が出題されることもある。過去問や予想問題演習に取り組んで、解法に習熟しておこう。

〈漢文〉

300 字程度のやや長めの文章を読み、素早く大意をつかむ訓練を積んでおきたい。曖昧な本文理解では選択肢の正誤を見極めることが難しい年度もある。句法や重要語をふまえ、主語・指示語を明らかにし、丁寧に本文を読み解くという基本に忠実な学習を心がけよう。また、白文の書き下し文問題や空欄補充問題など、頻出の設問形式には十分慣れておきたい。